

浄土

1991-5

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（准拠省 特別授承誌） 第三二五号
平成三年四月二十五日印刷 平成三年五月一日発行
第五十七卷

五月号





五月の秀句

藍々と五月の穂高雲をいづ

飯田 蛇笏

滝おもて雲おし移る立夏かな

飯田 蛇笏

戸袋にあたる西日や竹植うる

飯田 蛇笏

五月号



道綽禅師は決定往生の先達なり。
智慧深くして講説を修し給いき。

——『念仏大意』

目次

——法 話(上)——

魂のふるさとおもちですか……………正 村 瑛 明……(2)

(な)(む)(な)(む)(力)(メ)(ラ)(5)

おかあさんを写す……………ぬのむらてつや……(10)

仏教とデス・エデュケーション

——私の活動ノート——

〔Ⅱ〕……………藤 木 雅 清……(17)

《寄稿》

戦争のはざままで……………石 橋 紅 呂……(38)

(ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話)〔4〕 仏法僧と慈悲心鳥……………(24)

季語やぶにらみ (13)

囁 り ①

……………木 下 隆 一 ……(42)

読者のページ

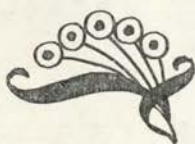
釈尊と浄土教(下)……………上 野 浩……(26)

表紙絵 小林治郎画



法
話
(上)

魂のふるさとおもちですか



いま、私は群馬県倉渕村山中の合掌園
におります。

遠く都市を離れ、この大自然の中に身
をおくと何かほっとし、自分自身をとり

まさむら
正村 瑛明

(東京・北区正受院住職)

もどすことができるような気がします。
この安心感、平和な心というものは、
とても懐しい感情です。

よく考えてみたら、この懐しい感情

は、日々、如来様の前に坐し、お念仏を申している時の心であることに気づきました。

東京生れの東京育ちである私にとって、ふる里は、まさしく東京であるのに、もっと根源的な憶しさがお念仏の中にこみあげてまいります。

法然上人の一番古い御伝記に『知恩講私記』があります。その中に、

「彼の土はわが本国なり、定んで還り往くべし」

とあります。彼の土とはお浄土です。お浄土が本国だ、というのです。浄土へ往生するというのは、何か異質な世界へゆくのではなく、わが本国、自分の本当のふる里へ還ってゆくことなんだ、と述べ

ているのです。

法然上人は齡八十、建曆二年正月二十五日にご往生なされますが、その月の三日に、あるお弟子が、

「今度のご往生は、決定か」

とたづねます。するとこともなげに一言、

「われもと極楽にありし身なれば、さ

だめてかへりゆくべし」

とお答えになったと伝えられています。

自分はもともと極楽にいた身であるからそのもといた極楽へ還ってゆくことは決まっている、とおっしゃっております。

お浄土は魂のふる里。お念仏はその魂のふる里へ還ってこいよという如来親さまの呼び声にこたえた声。人生は、だから、この魂のふる里へ還ってゆく道中な

のだ、と上人は受けとめていらっしやるかのようにです。

人生の謎ときは、ここにあります。

この不可解な人生とは一体何なのか。

それは、魂を磨かんがため、魂を豊かに成長せしめんがため、魂を輝かさんがために、この人生というあともどりできぬ道を歩かされているのです。

この山中の自然環境（ここは特に靈氣のみなぎった場所です）に身をおくだけで、私は静かな安らぎと充足感に包みこまれます。

ナチュラルとは、自然のと訳されますが、『浄土宗大辞典』によると、「この語はラテン語のナチュレ、さらにギリシア語のフィシスに由来し、いずれも本来

“生む”という意味をもっている。ギリシアにおいては、自然はみずから自然を生むと考えられた。自然の生み出す面は能産的自然、生み出された自然界は所産的自然ともよばれる。この自然のうちに小自然としての人間も含まれている。人間にとって自然は生みの親であり、“母なる自然”である。従って、“自然にそって生きる”ことは人間が人間としての本性にそって生きることであり、“よく生きる”ことにはかならない。（ナチュレには、本質という意味もある）とあります。

人間が人間本来の本性にそって生きる時、母なる自然に抱かれている実感を、この山中にいと、ある懐しさをもって受けとめることができます。

それはまた、お念仏の中にしみじみと受けとめられてくる懐しき感情です。

如来さまからそのまま愛されている実感を頂くと、人生のもう一つ向うの意味がみえてくるような気がします。

その実感はどうのようにして人は手にすることができのでしょうか。

それには、一つのプロセスが必要です。よく言われることは、無常感・罪悪感・虚無感などによって、あなたは一度、絶望の底へおとされねばならない、絶望なくして真の愛の実感を手にすることはできないということです。

闇におとされねば、光の喜びを手にすることはできない、また、空腹の中で、一片のパンの尊さと出会うことができ

る、と。

数年前、まだ残暑厳しい九月初め、縁あって、比叡山横川よかわの元三大師堂がんざんだいしというところで数日間お世話になったことがあります。

そこで、こんなお話をうかがいました。標高六五〇メートルといわれるこの大師堂あたりは、うっそうとした樹木におおわれて大変涼しかったことをおぼえております。

ところが、梅雨期は猛烈な湿気で、すべてがびしょびしょになり、放っておくと、カビだらけになってしまいます。冬期はマイナス十七度、十八度という厳しい寒さが何日も続くのだといいます。だから、火の気のない叡山に暮らす修行僧

は、秋が深まって葉が散りはじめのを目撃するとぞっとするといいます。

しかし、こうした厳しい自然環境の中で、実は、ほんとうの人間がつくられてゆくといわれ、思いやり深い人格が形成されてゆくといえます。

自然に対して、人間は如何に無力であるのか、ということを知らされることでの厳しい生活を通して、人は他者の痛みに気づき、他者の悲しみが腹の底に響いてくるようになるのだといいます。

私は、こうしたお話をお聞きしながら、この叡山の厳しい自然環境の中で各宗の祖師方も命がけの修行をされ、やがて、人間が人間としての本性にそった法爾自然の生き方に目覚められたことを思

い、人知れず胸熱くしたものでした。

慶応大学の今は亡き田中木又先生の歌に、

坂三里 つらさが楽し 里がえり

若葉のあなた 桃の咲く家

というのがあります。

山村から縁あって町へ嫁に行った若いお母さん。今と違って昔は姑さんに気づかってお里がえりもまゝならぬお嫁さんが、「里で田植えが始まりますから」と田植の手伝いを口実にお里がえりをする事になったのです。

背に小さな赤ん坊を背負い、右手に赤ん坊と自分の身のまわりの荷物をもち、左手には、ふる里へのささやかな手土産をもち、三里もある長い坂道を登ってゆ

きます。

想像しただけでも、大変な労苦です。

体はきつい、苦しい。しかし、あの峠をこえたら、自分が思う以上に想って下さっている父母やふる里の懐しい人々が待っていて下さる、と思うと、体は一步一步きつい、苦しいけれども、心は、喜びに満ちあふれてくる。若葉もえいづるふる里、桃の花咲く家々。

ふる里への思いが、見えぬ力となって、この一步一步のつらさを溶かしてくれます。今の苦しさをいやしてくれる、支えてくれる、引張ってくれるのです。

懐しい方々の声が聞えます。

この思いは、三里の坂を一步一步登ってゆく者にしかわからない実感です。

私の師匠の常の句に、

山越えや また格別の水の味

というのがあります。汗を流し、足に豆をつくって山を越えて来た者でない、この一杯の水の味わいはわからんのであります。

ご流罪の途中、法然上人は、播磨の国高砂の浦で、多くの人に結縁したのですが、その中に七十歳余りの老人夫婦がいました。

そして、法然上人に向って、

「自分たちはこの浦の漁夫です。幼少の頃より漁業をなりわいとし、朝夕に魚貝類の命を絶ちて生活してきました。ものの命を殺すものは、地獄に堕ちて苦しみ耐え難いと聞きます

が、どうしたらよろしゅうござい
すか。どうぞお助け下さい」

と手を合わせて申し述べると泣き伏して
しまいました。上人は、あわれに思い、

「そのようなことがありましても、南

無阿弥陀仏とお称えすれば、仏さま
の悲願に乗じてお浄土に往生いたし

ますよ」

と懇切にご説法されると、その老夫婦は
涙にむせびながら喜びあったのです。

その後、この老夫婦は、漁の生活をや
めることはできなかったが、口に南無阿
弥陀仏の名号を称え、夜は家に帰って二
人共に声をあげて夜通しお念仏をしたの
で、村人たちを驚かせたといっています。

やがて、臨終を迎え、仏の来迎をうけ

て正念往生をとげられた、といっています。

手を取りあいながら、ふる里へ還って
ゆかれる二人の老夫婦の姿を想い、ほん
とうによかった、ほんとうによかったと
思えるのです。

この老夫婦の喜びがしみじみと感ぜら
れて嬉しくなっています。

「彼の土はわが本国なり、定んで還り
往くべし」

心が、魂のふる里、お浄土へ向けられ
たとき、人生上のすべての物事が如来さ
まのお慈悲のお手まわしであったという
ことに気づき、人は自らの人生に合掌せ
ずにはおれなくなります。

この稿が出る頃には、ここ合掌園も青
葉若葉の新緑に包まれているでしょう。

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十七巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

なむなむカメラ (五)

おかあさんを写す



ぬのむらてつや

「おかあさん まだ寝ないの」

夕食のあとかたづけのすんだおかあさんは
茶の間にすわりこんで ずっと何かをしてい

ます。

おとうさんや妹のみよちゃんとは とっくに
寝てしまって けんちゃんもふとんの中でう

とうとしていたのですが 明りのついている
茶の間から小さなささやく声でしたので ふ
と目をさしました。おかあさんは一人のは
ずです。

じっと耳をすますと なにかいいながらや
っているようです。

おかあさんの口からもれてくる言葉は “み
んな元気にね” と聞こえます。こんなにおそ
くまで何をやっているのだろうと ねむい目
をこすりながらおき上ったけんちゃんがお
かあさんの肩ごしに声をかけたのです。

「あら まだ眠ってなかったの。もう少しだ
から先に寝てちょうだいね」

それだけいうと またさっきの言葉を小さ

くくりかえしながら赤い布を針でぬいはじめ
ました。

おかあさんのひざの前には 五つの赤いぼ
うしが並んでいます。六つ目がもうすぐ出来
あがるのでしょうか。

“それなのにするの” とけんちゃんはたずね
ようとしたのですが おかあさんがあんまり
熱心に手をうごかしているの で つい聞きそ
びれてしまいました。

「そうだ あれがあったつけ」

タンスの上からカメラを持ってくると お
かあさんの手にしている針の光にむかって
“なむなむ” といいながらシャッターをそっ
とおしました。

カチャッ！

針の先に何十個分かの雷が一度におちたような稲妻がはしって けんちゃんはあるという間にレンズを通り まっくらなカメラの中へふんわりと立っています。

なむなむカメラの中では 姿は見えないのですが いつものように ピカリのなむなむが いっしょです。

「こんなよるおそく ごめんね」

けんちゃんが すまなそうにあやまると

「いいんだいいんだ。わたしは いつでもどこでも 光にむかって “なむなむ” とカメラのシャッターをおしてくれる人のそばにい

るんだから」

と ピカリのなむなむが云ったとたん

ピカッー バリバリ！

目のまえの闇を切りさく大きなせん光。

まっくらやみの空いっばいにひびく爆音。

“空襲敬報発令々々々々々々——”

耳をつんざくようなサイレンの中で ピカリのなむなむが話してくれます。

「こんな言葉は けんちゃんにはわからないね。ずっと前のことだから。もちろん

けんちゃんのおかあさんも知らないことなんだけれど おかあさんにとっては忘れられないことだったらしいよ。

毎年 五月のなかばを過ぎると まだ子供

だったおかあさんの枕もとで 赤い布をぬっ
ているおばあちゃんの姿が かならずあつた
んだ。

おかあさんも けんちゃんと同じようにた
ずねたんだ。

『それ なあに』

『これはね』

おばあちゃんが答えた。

カチャ！

まわりは真っ赤だ。昼間なのか夜なのか。

空は一面赤黒くそまって雲をこがし 地上に
あるものはすべてものが炎になって舞いあが
り 熱風がうずを巻いておし寄せる。

おばあちゃんの家族は お隣りに住んでい

た よねちゃんの一家といっしょに ひとつ
の防空ごうにひなんをしていた。

おばあちゃんとよねちゃんは同じ学年だっ
たので いつも学校の帰りには道ばたのレン
ゲ草をつんでは首かざりを作り仲よくあそん
でいた。

“ゴー パリパリパリ”

とうとう家も焼けおちて 防空ごうもあぶ
なくなつた。

「また遊ぼうね げんきでね」

水にひたした赤い防空ずきんをかぶると
家族はそれぞれに手をつなぎ火の幕をくぐっ
て行った。

そして おばあちゃんは ふたたびよねち

やんたちと会うことはなかった。

五月のさわやかな青空。その日が来ると

おばあちゃんは 赤い布で作った六つのぼうしを持って 小さかったおかあさんの手を引いて近くのお寺へ行く。

「げんきでね」といいながら お地藏さんにぼうしをかぶせると

「今こうして毎日をすごせるのは あのよねちゃんたちが “げんきでね” といってくれているからなんだよ。せつかくそういってこれているのだから げんきでいなくてはね」

そんなおばあちゃんのすることを見たり聞いたりしていたおかあさんは おとうさんのところへおよめに来てからも そのことを忘

れることはありませんでした。

カチャッ！

「オギヤーオギヤー」

泣き声がして 手足をのばしている赤ちゃんが写ります。

みんなのいのちを ぐうつとのばす

天から雨を 地からは水もらって

空には光 そよぐ風

げんきでねと うたう風

「ああそうか だから赤ちゃんはげんきにそだつんだ」

けんちゃんの声といっしょにシャッターの音。

カチャッ！

「これは何が写っているのだろう。ひどくブレている」

ピカリのなむなむが説明してくれます。

「それは けんちゃんが友達とテレビゲームをやるか それとも宿題をした方がいいか まよっているの で ピンボケなんだ。でも よく見てごらん。だんだんピントがあつてくる」

見ると けんちゃんのだいすきなスイートポテトを作りながら 『げんきにあそびなさいよ』といっている台所のおかあさんです。

カチャッ！

写真がかわります。

「げんきで大きくなった みよこの花嫁すが

たが見たいわ」

といいながら 着せかえ人形の好きな けんちゃんの妹のみよちゃんのために かわいいレースのウエディングドレスをぬっているおかあさん。

カチャッ！

また かわると 会社へ行くおとうさんに
「げんきでおつとめしてくださいね」
と送り出すおかあさん。

毎日 “げんきでね” といいながら みんなのご飯をつくっているおかあさん。その言葉はあの空襲の下で炎の中に別れて行った おばあちゃんの友達のよねちゃん達のことを思い出させます。

「あの人達は どこへ行つたんだろう」

けんちゃんがいうと なむなむカメラの中
が急にあかるくなつたかとおもうと 海の底
のサンゴのような炎が立ちのぼり その火は
やわらかい風になつてレンゲ草が咲きみだれ
る野をわたると そこには けんちゃんのお
じいちゃんもおばあちゃんも そのまたおじ
いちゃんもおばあちゃんも そしてあのよね
ちゃん達もいるのです。

「げんきだね」とみんなニコニコしているの
で けんちゃんがそちらへ行こうとすると
ピカリのなむなむがいます。

「それはだめです。あっちへ行つてはいけま
せん。そちらは——」

カチャッ！

カメラのシャッターがしぜんにおりて け
んちゃんは あたたかい気持のいいふとんの
中です。

茶の間からおかあさんのやさしい声がしま
す。

「さあ ことしも赤いぼうしができました。

「げんきだね」

けんちゃんは その声をききながら また
静かな寝息をたてはじめます。

「げんきだね げんきだね」

その声は いつまでもつづいています。

(おわり)

仏教とデス・エデュケーション——私の活動ノート……(2)

藤 木 雅 清

(D・E・S——
臨死問題研究会代表)

東奔西走のころ

どのようにしてめぐりあったのま記憶は定かでないのだが、発会早々『臨床精神医学』（一九八三年八月号）という雑誌を入手した。そこには「臨死患者と精神医学」という特集

が組んであった。耳慣れない用語が多かったのだが、つまり、死にゆく人にどのような精神的ケア（援助）をしたらよいかという考察の論文集であり、このうち何人かの執筆者が宗教的なケアの必要性を説いていた。

医療における宗教者の役割が望まれている。私の直感した問題意識——医療界の現状は、

それが検討外れでなかったことを示していた。しかし、じっさいに活動するといふとき、何をどうすればよいのか、まったくわからない。まさか、いきなり見知らぬ病院へ行つて、一面識もない患者（それも余命数カ月という末期の）に「私は僧侶です。あなたの死の不安について……」などと切り出すわけにもいかない。ましてや、人生の一大事である死に直面している人に対して何ほどのことができるのか見当もつかない。もちろん、自信などさらさらない。

医師であれば、六年間の医学教育を受け、臨床実習を重ね、日々の診療のなかで蓄積されたものがあるから、少なくとも肉体的な面では（程度の問題はあるにせよ）十分な対応ができるであらう。しかし、同じ専門職といつて

も、そのような場で宗教者として何ができるのか。キリスト教の神父や牧師であれば教育課程のなかにそのような分野もあると聞いているが、私たちは学んでいない。問題意識はあるのだが、まったく入り口のわからない状況だった。

医師との出会い

しかし、そのようなことを悩んでいてもしかたがない。とにかく行動あるのみと思ひ、前述の執筆者へ会見を申し込むことにした。数人の執筆者の評価などわからない。とりあえず「仏教的な側面からのケアが望まれる」と述べておられた水口公信氏にいきなり電話をかける。「私は僧侶で、死の問題に取り組

みたいと思っております……」と。こちらの問題意識も立場もうまく説明できない。それはそうだ。問題の背景も知らず、直感だけでウロウロしているのだから。「とにかく、お会いしてお話しをお聞きしたい」とずうずうしくもお願いしたところ、「夕方は少し時間があるからいらっしゃい」とのこと。これが、いまでも当会にとって指導的な立場としておつきあいいただいている水口先生との出会いである（それから後、先生から多くの末期医療に携わる医師・看護婦・ソーシャルワーカーの方がたや研究会をご紹介いただいた）。

水口先生について少し述べておきたい。

前述の経緯で先生と知り合った当時、国立がんセンター病院（東京・築地）麻酔科医長という立場におられた。おだやかな風貌と語り

り口のなかに患者さんに対するときのやさしさが感じられる人である。当時、病院内でターミナル・ケア研究会を主宰されており、毎月、症例検討を中心とした勉強会を開いておられた。毎回、数名の医師と二〇名ほどの看護婦が参加し、座長をつとめる先生の様子から人望のあることもうかがえる。およそ半年間、われわれも宗教者という立場としてオブザーバーで交代で参加させていただき、多くのことを学ばせていただいた。

のちに、浄土宗侶の大先達はこれらの問題についてどのような考えをお持ちなのかということから仏教者と医療者の対談を企画したが、そのときにも、奈倉道隆先生の司会で藤井實應門主猊下と対談していただいた（『生と死の最前線』文化書院、一九八六年）。その後、

類書がいくつか出版されるようになってきたが、この分野の先駆的な企画・出版であったと自負している。先生は現在、出身校である千葉大学医学部教授（麻酔学）として活躍されている。

ホスピスへの道

とりあえず会の研究テーマを「宗教的ケアの模索」とし、会員間で相互研修をすることにした。いまでも「宗教的ケアとは」というテーマで話す機会が少なくないが、その背景について述べておきたいと思う。

ターミナル・ケアを実践する場としてホスピスという施設がある。これは、中世ヨーロッパの十字軍遠征のときに発生した語で「休

息する。旅の疲れを癒す」という意味でありのちにホテル、ホスピタルの語源にもなっていく（一般にはホスピスという施設、概念が近年になって急速に出現してきたため逆に受け取っている人がいる）。この概念を医療の場で、とくに病状改善のための治療を施す術（すべ）のなくなった末期患者に取り入れようと発生したのが近代ホスピスである。その濫觴は、一九六〇年代、イギリスのシシリ・ソングラスによるセント・クリストファー・ホスピスである。この近代ホスピスの発生によって、末期医療に関するさまざまな情報が提供されることになる。そのなかのひとつに四つの痛みというとらえ方がある。

末期患者には四種類の痛みがあるという。すなわち、患部が痛いとか吐き気がするとい

った身体的(肉体的)痛み、鬱など心の不安をあらわす精神的(心理的)痛み、やり残した仕事や相続のことなどの社会的(経済的)痛み、死んだらどこへ行ってどうなるのかという宗教的(霊的)痛み——である。痛みとは、それを除いてほしいという要求となるし、要求があれば、それに対していかにケアするかということになるので、このことは、四つの要求(ニード)、四つのケア(援助)ともいわれている。

これに対して、身体的痛みには医師、精神的痛みには精神科医やカウンセラー、社会的痛みにはソーシャルワーカー、宗教的痛みには神父、牧師、僧侶が当たることになっている。ひとりの患者のために、これらの専門職がチームを組み対応するというのがチームア

プローチ、またはチームケアと呼ばれるものである。じっさいにここ十数年、末期医療に関する研究は盛んになり、多くのシンポジウムや研究会が開かれている。そこでは医師、看護婦を中心にさまざまな事例が検討され、「いかにあるべきか」が熱心に研究、討論されている。しかし、われわれがもっとも関心を寄せるところの宗教的痛み、および援助の在り方についてはほとんど議論されることがないのが現状である。

宗教的痛みとは

宗教的痛みに関する発表のほとんどはキリスト教系病院のチャブレン(病院付き神父、牧師)のものであり、たまに僧侶からの発表が

あっても教義の羅列に終始することがほとんどで、現実とあまりにも乖離しているため、大多數の医療従事者は関心を示すことがない。それでは、十分に現状を考慮したうえで、仏教者からみた宗教的痛みとは何なのか、それに対してどう対処したらよいのか——をテーマに研究をすすめていくことにしたわけである。

一般には、前述の四つの痛みは、それぞれ独立し、互いに影響し合っていると説明されている。つまり、肉体的痛みもあるが精神的不安も経済的悩みもある、というようなことである。そして、それは、たとえば肉体的な痛みが激しければ精神的な不安もつのるし、精神的な不安が解消されなければいくら麻酔薬を投与してもいっこうに痛みが軽減しない

という相关性をも併せもっているというわけである。

こうした痛み——とくに死に臨んだ人の痛み——の考察において、宗教的な痛みとはどのようなものであろうか。このことについて、医療者を中心としたシンポジウムなどであり語られないということは、「医療者が患者の宗教的な痛みがどのようなものかわからない」↓「わからないから感じ取ることができない」↓「対処(それに対する援助)されない」という図式が成立しているようである。じっさいに臨床の場で患者の宗教的痛みに対処するためには、医療者の宗教理解と宗教者の医療理解がある程度必要であるし、そうした前提に立って相互に信頼し合うチームが機能することが不可欠である。医療と宗教の連

携の必要性が叫ばれてから数年を経、よくやくそのきざしは見えはじめたというものの、現状を見る限り、まだまだ欧米諸国のように宗教者がベッドサイドで活動することはむづかしいであろう（宗教的痛みとは何かについての見解は次回に述べる）。

こうしたなかで、一部では「僧侶で病床に立つ」ことを目的とした動きもあるが、一般に医療における極端な無宗教性といった現状を見ると、同様に他のアプローチも必要である。それは、限定された「末期」患者の病床という場だけでなく、健康時から生と死を見つめて生きるサークル活動をするとか、いつでもどのようなケースでも連携できるような医療者、宗教者、そしてそれを取り巻くあらゆる分野の人たちとの交流など、さまざま

な底辺の活動が臨床での宗教的援助の模索と並行してすすめられなくてはならない。

「死」を見つめるさまざまな動きがブームのごとき様相を呈してきているが、それは、（ほんとうはそうではないのだが）死と対比される生が見えにくくなった現代を象徴しているからであろう。ならば、タブーとされていた死を表通りに出すことで終わってしまうのではなく、そこから「いのち」の有限性のことや、非生産的な立場である障害者、高齢者、子ども（未成年者）らの問題についても同じ問題として視野に入れてゆくべきであろうと思っている。

（つづく）

仏法僧と慈悲心鳥

勝 崎 裕 彦

鳥の名前にも仏教にちなんだものがある。

五月のはじめの頃、南方から渡来する渡り鳥に仏法僧と慈悲心鳥があり、季題としても多用され、秀句も多い。

仏法僧こだまかへして杉聳てり(林火)

慈悲心鳥おのが木魂に隠れけり(普羅)

仏法僧は三宝鳥ともいわれ、ブッポーソーの鳴き声をもって知られてきた。一方、慈悲心鳥は十一じゅういちとも呼ばれ、その鳴き声はジヒシンともジュイッチーとも聞こえるという。右の二句は、いずれも鳥の鳴き声の特長に感じ入

り、高山深緑の大地にやまびことなる趣きを聴き取っている。ところで実際の渡り鳥の仏法僧はギャーギャーと濁声だみこで鳴くばかりで、声の仏法僧の本体はふくろう科の木葉木菟このはずくであるといい、昭和の初期までは誤伝されてきたという。

いずれにしても鳥の声を聞いて、篤く三宝を敬い、仏菩薩の慈悲の御心みこころをいただく。私は、新緑の山峡、谷川のせせらぎを遠く想い浮かべて、ブッポーソーの響きを耳に、ジヒシンの声に心を溶かしたい。若葉青葉の五月の薫風に机辺をまかせながら、はるか山あい
の音の便りに心を寄せる。

慈悲心鳥の声暖めて録音す(裕彦)

◆◆◆好評の新刊◆◆◆

暮らしに
生かす

仏教成語辞典

寺内大吉・栗田順一編 価二二〇〇円

◎ 仏教の心と豊かな智慧のエッセンス！

仏教語が日常用語として多くの人に使われているが、その仏教語を理解して、またその語意を把握して使っている人がどれほどいるだろうか。本書は馴じみ深い仏教成語一二九の原意、仏教の真髄をわかりやすく説いた仏教入門書。

△出版・発行▽

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三ー七 電話(〇三)三三三三ー三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三)三四三六ー三三五一まで。

釈尊と浄土教（下）



上野^{うえの}

浩^{ひろし}

さて菩薩への修行というのは、どちらかといえば自らのさとりをあとにして、他人をしてさとらしめる自利利他を行う

求道者である。そしてその宗教実践としては、経典によると六種のパーラミター（六波羅蜜）、すなわち布施、持戒、忍辱

精進、禪定、智慧の六種の修行を行わなければならず、そしてまた、その修行段階を五十二位に分けて示した經典もある。菩薩とはかくもきびしい修行の中にある。しかしそれでも心ある人々は菩薩行に立向ってゆくが、しかし菩薩の地位にまで進むのはかなりむずかしい。それはどうしてだろうか。それは自己の宗教的能力が足りないからである。明からさまに言えば、宗教的能力の高い少数の人々を除いて多くの人々は、おのれがいかに愚かで、かつ罪深いものであるかをやがてさとするのである。

たとえば、これを經典の言葉をかりる

と、人の宗教的能力に上品、中品、下品の段階があるが、多くの人々はそのうちの最下級の下品にあたる輩であることを知るだろうということになる。このことは、わが国の名僧法然上人でさえも自らを「愚痴の法然」であるときとり、名僧親鸞聖人でさえもおのれを「罪惡深重の凡夫」としたこと、に徴しても否定するわけにはゆかない。

このような私共にとって菩薩行の道は極めて困難である。ところが大乘仏教は菩薩への修行道とは別に、凡愚の私共でも容易に救われる道を数えてくれたのである。それは何かといえは浄土への道である。

教え、「浄土教」である。それならば浄土教とは一体いかなる教えであろうか。そもそも仏道修行者であって苦行を殆んど完成したものを菩薩というが、菩薩であって、やがて衆生救済の誓願などまで完成して行ったものを仏陀という。この仏陀はそれぞれすべて自分自身の仏国土をもっており、その仏国土に住んで衆生を救済しているのである。

いま、凡愚の人は菩薩の道の修行をしなくとも、仏陀の力をたのみ、その力によつて仏国土に生れ、成仏をなすとげる道がある。すなわち仏陀の誓願を信じ、仏陀を念ずればその死後その仏陀の仏国

土に往生し、安楽な生活を送ることができるといふ教えである。これらの仏陀の仏国土の例をあげれば、阿弥陀仏の極楽浄土、阿閼仏の妙喜浄土、大日如来の密嚴浄土、薬師如来の浄瑠璃世界、観音菩薩の観音浄土そして弥勒菩薩の弥勒浄土などがこれである。この教えを浄土教という。また密教によるとさらに多くの仏陀が出現する。

ところで仏教の開祖釈尊は当時果して浄土教らしいものを人々に教えたのだろうか。このことは仏教上私の極めて大きな

注目を引くところである。しかしこれについては従来あまり明瞭な資料は伝わっていない。多くの仏教学者の説によれば浄土教が原始仏教の中においてその萌芽をみせたことはたしかであり、そしてインド仏教の中で浄土教が誕生し、成長してきたことは認められるところであるが、釈尊がみずから浄土教を説いたということは歴史上からいいうるところではなく、現代の仏教学の上からいえばむしろ否というほうが真実に近いであろうとさえ伝えられている。果してそうであろうか。

私は今日まで釈尊仏教の流れをくむ多

くの名僧たちが、明らかに仏教として他力的な浄土教を熱心に発展せしめてきたという事実をみると、釈尊もある種の形で浄土教に近い他力救済思想を教えたのではないかと思われて仕方がない。私はここで釈尊のある弟子の物語りを引用してみたいと思う。

釈尊の弟子にパンタカという二人の兄弟の出家僧がいた。兄のパンタカは早くから釈尊の弟子となつて、すでにさとりをひらき、聖者の境地に到達していたので、兄は弟のパンタカをも出家させて修行者の道にはいらせた。そして兄は弟に「身と言葉と心とで悪いことをしなければ

ば、世の生きものたちを悩ますことはない。正しく念じて欲望の対象が空しいと知るならば無益な苦はきつと遠ざかるにちがいない」という詩を与え、これを暗記させようとした。ところが弟のパンタカはどうしてもこの詩を覚えることができなかった。ある安居の日のことである。弟のパンタカは兄から与えられた短詩をどうしても覚えることができなかった。ので、兄はこれを怒り、「お前のような愚かものは仏道に志してもだめだ」といって弟を強くののしった。

弟のパンタカはおのれのふがいなさ
に、部屋の外にでて声をあげて泣いた。

その時丁度、釈尊がそこを通りかかり、この場の情景をみて、弟のパンタカを上げますと同時に、愛弟子アーナンダを呼び、彼にパンタカの指導をするように命じた。しかしアーナンダもまたどうすることもできず、遂にパンタカを指導することはあきらめてしまった。そこで釈尊は弟のパンタカを呼び、「私は塵を払う。私はよごれをきよめる」という句のみを与え、これを暗記するよう命じた。しかしパンタカはこの二句さえも覚えることができなかった。ここにおいて釈尊はパンタカに修行僧たちの履物の塵を払わせながらこの二句をとるよう命じた。

パンタカはこれを一心不乱に実行していたが、そのうちにこの二句からよごれの本質を達観し、遂に聖者の境地に到達することができたという。これは古經典の伝えているところである。

このパンタカ弟の話のように、ここに極めて凡愚なものがいて、さとりをえた心はもちながら、むずかしい苦しい修行をしていたのでは到底目的を達することのできないようなものがあるとしたらどうであろう。このようなものに対しては釈尊は極めて簡単な短文、あるいは詩または句などを暗記させ、くりかえしとなえさせて、その関連からさとりに至ら

しめる方法をとったことは明らかである。凡愚のものがどうしても難行を突破することができない場合にも、釈尊はこのようなものを見捨てることなく、これを哀れに思いどこまでも救いの手を延べてやろうという心から、何か他の簡単な言葉をたよりに、他の大きな力にすがってさとりをひらかせたのではないかと私は確信しているのである。これは他力思想とも考えられ、当時その力となったものは、あるいは過去仏であったかもしれない。

勿論私は釈尊がはじめから進んでこのような方法をとったとは思わないし、ま

たある程度はいかなる人に対しても一応は自分の修行をすすめたことと思う。しかしこの人生においては、宗教的能力の高いものばかりがいるとは考えられない。万人成仏を叫ぶ釈尊の立場からいえば大衆の中にはどうしても凡愚のものがいたはずである。したがって釈尊がこの凡愚のものを導くには、他方中心の教え方をとらざるをえなかったのではないかと私は考える。

ところで特に中国やわが国においては、多くの人々は数多い仏陀のうちでも

古いところから阿弥陀仏（阿弥陀如来）を最も深く敬愛するようになった。そもそも阿弥陀如来というのはインドのある王国の王が出家して法蔵菩薩を名のり、ながい間の修行を経て、西方に極楽という仏国土を建設し、いまそこにおられる仏陀である。阿弥陀如来は私共のため四十八の誓願を立て、それを成就して私共を死後その仏国土である極楽に往生せしめてくれるのである。ではいかにして私共は極楽に行けるのだろうか。それは大した苦行もいらぬ。私共が阿弥陀如来を信じ、これを念ずればよいのである。

阿弥陀如来については、インド、中国、

およびわが国の名僧達が深い支持を与えている。それではこの名僧達が阿弥陀如来の浄土教を支持した状況をみてみよう。すなわち、インドの馬鳴めみょうは西方浄土の往生をすすめた。龍樹は仏道修行には難行道と易行道との二道があることを説き、このうちでも易行道である浄土往生は水道に乘船して行くように極めて容易な道であるから、宗教的に凡愚のものはむしろこの道によるべきことを教えた。世親（天親）は極楽浄土を讃美した「浄土論」を著した。中国においては、廬山の慧遠等が阿弥陀仏に対する念仏をとらえた。しかし慧遠等の浄土教は禅定の心中

に仏を思惟する、いわば自力的、賢人的な色彩の強い念仏であったが、その後曇鸞がでて、彼は観無量寿経を発見し、大無量寿経および阿弥陀経とあわせて浄土三部経を正依の聖典として認め、浄土教の他力面を強く打ち出したのである。ついで道綽は曇鸞によって浄土教に転向し、龍樹の説いた難行道および易行道に對して、難行道を聖道門、易行道を浄土門と呼び、宗教能力の高い者は聖道門、宗教素質の低いものは浄土門によるべきを説いた。ついで善導が出て中国浄土教を大成せしめたのである。善導はこの人生は絶対的に悪なるところであり、浄土

は絶対的に美しいところであるとした。そして浄土に往生するための行業に正行と雑行とを区別し、読誦、觀察、禮拜、称名、讚嘆供養の五種の行を正行とし、そのうち称名こそ人々の生活を通じて行ないうる往生の正定業であるとしたのである。善導のわが国の浄土教に及ぼした影響は極めて大きい。

わが国においては空也、源信などがあるいは身をもって浄土教を教え、あるいは著作などを通じて浄土教を説き、またその他に念仏を広めた名僧も多い。特に源信の「往生要集」は地獄、極楽の存在を明確にし、地獄の姿を詳しく画いてい

る。その後になって、鎌倉時代に源空（法然）がでて、善導の流れを汲み、その教説から指針をえて遂に大乘仏教の万人救済という大目的に沿って徹底した教義を発見するにいたったのである。その教義とは「人々は何もむずかしい修行せずともただ一向に『南無阿弥陀仏』と口になえるだけで、その人は死後、極楽浄土に往生することができなのだ」というのである。これこそ浄土教の窮極、他力本願思想の最高点といわねばならない。の一大業績といわねばならない。

ところで源空の弟子、親鸞はこの思想を更に進めたことをここにあげたいと思

う。彼は大量壽經の教える阿彌陀如来の成就した四十八の誓願をとりあげ、この四十八願は何れも念仏往生の願と解せられるとしたが、その中特に第十八願の、念仏往生の願は最も重要な願であるとし、人々は仏陀に対する「信」にそえて念仏をとる二つの行によって浄土に往生できることを発見したのである。

すなわちその思想には人がこの世においても誓願を信じたときからすでにその人は浄土に近いところにいるのだし、念仏はむしろ救われた後の報恩を意味するものだといふ切ったのである。これを不体失往生といひ、人は現世においてもす

に往生をとげることができるという意味である。

それでは多くの人々の願望する極楽浄土とはいかなるところであろうか。これについては私が『浄土』誌の、平成二年六月号に「極楽浄土を考える」という題名で詳細に述べたのでここには省略することとする。

さて、私共は多くの言葉をついやして釈尊はたして浄土教というようなものを考えていたのだろうか、そしてまた浄土教とはいかなるものかについて述べてき

たが、私はここでむすびの意味で私共の浄土教に対する態度について考えていたことをのべてこの文の結びとしよう。

私共はすべて仏陀を信じ、念仏をとなえさえすれば安楽な極楽浄土に往生することができると教えられた。しかしそれでもなお易行道にふり向かず、苦しい難行道をえらぶ人々のあるのは何故であらうか。これは極めて大きな仏教上の問題である。これについては私は次のように考える。人としてあらかじめ苦しい修行もせずに、易行道によって浄土に往生をしたものは、実はただ「往生」をしたただけであって、これから浄土においてさら

に仏陀になるための修行をつまなければならず、そして仏陀にならないうちはまだ輪廻から逃れることはできないものと考えられる。経典にも「念仏往生」とは教えているが、「念仏成仏」という語は見出すことはできない。この点はよく注意すべきことである。したがって私は浄土教を信仰される人としても、その前に一応きびしい修行の道を経験していただき、そしてその結果自分の宗教的凡愚をさとしたとき、しかるとき浄土信仰に入るのが正しい道ではないだろうかと思う。これはあやまりであらうか。

(了)

○「浄土」表紙版画画販売についてのご案内

『浄土』五月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画画は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm × 30 cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm × 50 cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画画も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 千102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―一八七

《寄稿》

戦争のはざまで



いし ばし こう ろ
石 橋 紅 呂

昨年夏は、生きとし生くるものの息の根を止めるほどの猛暑であった。それにつづく秋の彼岸まで鎮まらなかった残暑はまだ鮮明に記憶にのこっている。その暑さの中で、ある一人の女性の手記ほど私の胸を凍らせたものはなかった。それはM新聞に「戦争と私」のタイトルにより読者から投稿されたものである。内容は次の通りである。

「戦争がはげしくなつて、農家の納屋に疎開することになった。夫は戦場に。残された家族五人（祖父母、私、五歳と三歳の女の子）は、納屋の土間にワラやむしろを敷いて暮した。電灯もロースクもなく、明りといえど戸口から差し込む月の光だけ。そんな中で赤ん坊が産まれた。男の子だった。でも食べるものもない母親から母乳は一滴も出

ず、牛乳も砂糖も粉ミルクもなかった。祖母は赤ん坊を抱いて、あぜ道を夜露にぬれながら隣村までもらい乳に行ってくれた。まっくらな納屋に帰り着くと赤ん坊はもう空腹になるのか夜泣きをする。幼い娘たちも泣き出す。するとすかさず母屋から「やかましい」と怒声がとんでくるのだった。こどもたちに泣くなと言いながら、私も意気地なく泣いていた。

戦場の夫には赤ん坊誕生のしらせをするすべもなく、やがて八月十五日終戦。待ちに待った夫は六カ月後に帰還。しかし夫は、小さな赤ん坊を見ても心を動かさなかった。石のような顔をしたまま、ついにその石の顔を生涯変えなかった。自分の子とはどうしても思えないということだったのだろう

か。

私たち二人の子だとう訴えても心の扉を開くことはなかった。そして亡くなった。無念というより他ない。私の心の中の戦争の傷は一生消えることはない。満月の夜が来ると、もらい乳に歩いた田んぼの道がよみがえる。平和ほど有り難いものではなく、戦争ほど過酷なものはないのである」

つめたい夫の顔、どんなに悲しかっただろう。妻の欲しかったのはお金でも物でもなく、夫の愛情だったのである。愛情さえあれば貧苦の中からはげまし合って立ち上れるのである。それに――。一生涯石のような顔をして心の扉を開かなかった夫。自分の子だとはどうしても思えぬそのかたくなな心は、戦場で生きた日の極限の異常な体験が、人間性を狂

わけてしまったのではないだろうか。一日千秋の思いで夫さえ帰ってきてくれたら、と待っていた妻の心は押しつぶされた。然し子供たちのために彼女は忍耐の日々を重ねたのだと思う。現在七十四歳という高齢で「匿名希望」なのである。もう老い先短いというのに何に気がねしてのことなのだろうか。耐えて来た長い時間の延長上に、要らぬ波を立てさせたくないのか、或は心の底で、夫もまた戦争の犠牲者であることを妻は悲しく思い、共々の一生傷として秘めておきたいという願いなのであろうか――。

右の手記が掲載されて五カ月の後に、アラブの地に戦争が起るとは誰が予測したのだろうか。一月十七日、遂に米国はイラクに空爆を

展開し、全世界の眼はいまアラブに集注している。長期化の恐れ、近代兵器による地球の汚染、日本の出方はどうする、石油はどうなる、難民の救済は……。激動する世界情勢のはざまに、蟻地獄のように右往左往する最も弱い庶民は、またもや踏みつぶされ、声もあげられず、憤死する人も数かぎりないと思う。恐しい戦争の影で苦しんだ経験を持つ戦争体験者はまだまだ数多い筈。一日も早い戦争終結を望んだことである。

人間の生命に限りはあるけれど、人間の業は果てしなく続く。旧約聖書をさかのぼる民族の根の所より争いは始まり、ハイテク兵器による地球規模の破壊を恐るる現在に至るまで、人間の業の果つることはない。近代文明を支えるエネルギー、石油の獲得に血を流す

大国のエゴ、後進国との貧富の大差に背筋が寒くなる。頭を冷やして自らの心のうちを省みれば、誰の胸のうちにも悪業の種はあるのである。

人間の歴史は戦いの歴史である。静かに思いをめぐらす時、一条の光となって胸に沁みこんでくる「ことば」がある。わが浄土宗の宗祖法然上人のお父上のお言葉、「恨みに恨みをもって報ゆるなかれ」である。このお言葉こそ、人として生まれたならば誰もが心に銘記しなければならぬお言葉である。地獄の沙汰のつづくアラブの戦争を思うとき、いかに人間の恨みが恐ろしいものであるか、それを超えてゆくには唯一つ、自己を否定して永遠の生命に（如来の慈悲）限りあるいのちを預けることより方法がないのである。この偉大

なるみ教えを頂いた私たちは迷うことなく如来様を信じて、助け合い、分ち合う生活を幼い時より身につけたいものと思う。

最後に、ある詩人の一節を掲げたい。

あの夜も 蛍の夜であった
戦友の屍をさがし得なかったジャングル
は

若者の純真の血を欲して止まなかった
激戦の蛮境には平和が帰って来たが
護国の英霊は還ることなく

靖国の社なんかにいないのだ
蛍の夜 こみ上げる熱いものに
じっとこらえて

私は闇に佇つばかりだった

季語やぶにらみ (十三)

囀り (1)

木きの
下した隆りゅう一いち

(隨筆家)

彼岸を過ぎて、ようやく鳥の囀りが活発になつてきた。例年より遅かつたような気がするが、これは天候のせいではなく、ここ一、二年雑木林を伐り開いて新築の家が急増したために鳥たちが住みかを失い、飛来する鳥の

種類も数も、以前に比べるとめっきり少なくなつたから、そう感じるのかもしれない。事実、あの小綬鶏の特徴のある啼き声は年々減少しているし、雉子の声は殆ど聞かれなくなつてしまった。

囀りというと、鳥の賑やかな啼き声という固定観念があったから、春の部の歳時記を開いて「囀」の項を見ても、例句を参考にするぐらいで、じっくりと解説を読むということはしなかった。もっとも、小型の歳時記には、小鳥の繁殖期、雄が雌を誘うために発する特殊な啼き声——と、まあこの程度のことしか書いてないから、あまり参考にならなかったせいもあるが。

それがなぜここにきて急に「囀」にこだわるかというと、私が所属している俳誌「春星」の四月の課題の中に、「囀」が含まれていたからである。これは私が最も苦手とする季節の一つであった。苦吟するといえば聞こえはいいが、学生時代の一夜漬けの癖がいまだに抜けず、切羽詰まった状態にならなければや

る気が起きない性癖は、いい年をしてまことに恥ずかしい限りであるが、課題句はいつもこんな調子で作られるから、多くは付け焼刃的な句になってしまふ。だから、たまに選ばれたりすると、選者に申し訳ないような気がしないでもない。ま、それはともかくとして、今回特に締め切り間際になって投函したのはいささが訳があった。というのは、別のことに興味を引かれ、気持ちがちのちの方へ傾いてしまったためである。その気持ちは「日本大歳時記」で山本健吉氏の解説を読んでいるうちに、おやつと思つた時に起こつた。それには次のように書かれていたのである。

囀まづら 春の鳴禽類の囀りを総括していう。地鳴きと区別して、高音こうおを張ったり、声を複雑に続けて鳴いたり、いろんな文句を交唱した

りする鳴き方にいう。大抵は雄だけが囀り、多く繁殖期の恋歌であるが、ある地区の占拠、いわゆるテリトリーを宣言するものもあり、また機嫌のよい時に歌う浮かれ歌もある。ウグイス、ホオジロ、ヒバリ、カワラヒワなどは春になると囀り出すが、ホトトギス、カッコウ、クロツグミ、オオルリコトは夏になつてからである。古形は「さひづる」「さひづり」で、異邦人や他郷の人が意味不明の言葉を言い立てたり、やかましくしゃべり立てたりすること。「さひづるやから(韓)」「さひづらふあや(漢)」など、枕詞にも使われているが、専ら鳴禽の声に使われるようになったのは、転義であろう。小鳥の滑脱な囀りが、軽快なおしゃべりとも聞こえたものか。

これを辞書で見ると、

さえずりⅡさへづり(囀) 自動詞ラ行五段(四段)活用。

①小鳥がしきりに鳴く。

②口数が多く、早口でしゃべる。

③外国人や地方の人、身分のいやしい者などが、聞き分けにくい言葉でしゃべる。

④雅楽で舞いながら、漢詩句などを朗詠する。

⑤べちやべちやとめどなく話すのをさげすんで言う。

さえずりⅡさへづり(囀) 名詞 (動詞「さえずる(さへづる)」の連用形から転成)

①鳥がしきりに啼くこと。また、その声。

②やかましくしゃべること。

③聞き分けにくい言葉でしゃべること。

④舞楽の曲の途中に見られる舞の手の一つ。

「陵王」「二舞」等に見られる。

⑤ はなうたまじり。

⑥ 鯨の舌。

そして、その補注として、

鳥の啼き声を地鳴きと囀りに分けた場合には、繁殖期の少し前から繁殖期にかけての時期にだけ聞かれる声で、チツとかチュンの単音ではなくて、やや長く続けられるもの。普通は抑揚があつたり旋律があつたりして、人の耳には音楽的に聞こえるものだけを言うことが多い。これは小鳥に多く、例えばウグイスの「ホーホケキョ」、ホオジロの「一筆啓上仕候」、メジロの高鳴きなどがある。

と、鳥の啼き声を第一に挙げたことに対する、多少言訳めいた解説が施されている。辞書の編纂もいろいろ気配りが必要で大変だな

と思う。更にその語源については、

① サへは擬声語か。〔時代別国語大辞典Ⅱ

上代編〕

② サへはサヘク(喧語)の語根。ツルはアゲツラク(論ふ)のツラフに通じる。〔大言

海〕

③ 障りて通じ難いところから、サヘ(障

出るの義。〔和訓栞〕

④ サヘツル(栄連)の義。〔言元梯〕

⑤ サヘツレル(清連)の義。〔名言通〕

⑥ 弁舌をよくするものの意で、サヘツル(才出)の義か。〔和句解〕

と諸説を掲げているが、いげれも疑問符付きで、これという決め手はない。ただ、「さへく(喧く)」という動詞の関連から見れば、二番目の「大言海」説が妥当なような気がし

ないでもない。

さへくⅡ騒がしい声で物を言う。聞き分けにくいように物を言う。ことさへく。

ことさへく(言さへく)Ⅱ枕詞。外国人の言葉が分かりにくくやかましいところから、よくしゃべる意をもって、「韓(から)」「百濟(くだら)」と同音語をもつ地名「からの崎」「くだらの原」にかかる。↓さひづらふ・さひづるや。(以上「日本国語大辞典」に拠る)

と、ここでようやく同義の枕詞「さひづらふ・さひづるや」に行き着くのであるが、枕詞自体には歌の調子を整える働きの他には、さしたる意味は無い。

「さひづらふ漢」の例は、「万葉集巻七、一二七三」の

住吉の波豆麻の公が馬乗衣雜豆藤漢女を据ゑて縫へる衣ぞ

という、柿本人麿作の旋頭歌に見られる。波豆麻の公が如何なる人物であつたかは定かでないが、余程人目を引く乗馬服を着ていたのであろう。いまでいうギンギラギンのサイケデリックな色調の物であつたのかもしれない。「あの服はわざわざ縫製の上質な漢氏の女を連れてきて作らせた物なんだよ」——そんな意味の軽い調子の歌だが、旋頭歌の形態をとっている以上、作詞者でもあるリーダーの指導のもとに唱和したのであろう。もしかするとこの歌は、酒席の座興に歌われたものではないだろうか。ダンディな波豆麻を酒の肴にして、みんなで打ち興じている場面が彷彿するのみである。

「さひづるや韓」の例は、「万葉集卷十六、三八八六」の、「おしてるや難波のい小江に盧い作りなま穩りて居る葦蟹を大君召すと……」で始まる長歌の後半部に、「天照るや日の異けに干し佐比豆留夜韓さひひづる白に搗き云々」と出ている。乞食者が詠ふ歌二首の内の一つで、「右の歌一首は蟹のために痛みを述べて作る」という後書がついている。奈良時代の末に、既に家々を廻って寿歌を歌って物乞いをする門付けの芸があつたとは驚きだが、確たる作者名が記されていないところに、私は一層興味を覚えるのである。

歌の大意は、「難波の入江に隠れ住む蟹が大君に召し出されて、はるばるのこのこ都の飛鳥まで出かけて行ったら、捕まってこつてり日に干され、韓かん白で荒搗きされた後手白で

搗き上げられ、おまけに難波江でとれた濃い塩水に漬けられ、更に干し上げられて、それを大君は舌鼓打ってお召し上がりになるよ」であるが、生きた蟹を搗きつぶして調味料にする方法は、いまでも朝鮮半島ではキムチに混ぜ込んだりするというから、半島経由で渡来した調理法だったのであろう。製品は、現在我々が食するふりかけのような物であつたろうか。

それはともかく、この歌の作者は誰だったのであろうか。蟹の所作を巧みに歌い込んだ「歌人と我を召すらめや笛吹きと我を召すらめや琴弾きと我を召すらめや」の個所や、「今日今日と飛鳥に至り置くと置せ勿なに至りつかねども津久野に至り」と地名に即興の枕詞を冠したあたりの技巧はなかなかのてだれ

で、到底乞食者風情の及ぶところではない。

学者は否定するが、私はこの長歌の作者を大伴家持だと思う。そして歌に出てくる大君は天皇ではなくて、当時天皇以上の権勢を誇っていた藤原氏の統領を指しているのではないかと。大伴氏は武門の出で、祖父 麻呂も父旅人も太宰帥の要職に就き、大納言まで昇ったが、家持は越中守を初め地方長官暮らしが長く、中央に帰っても中納言どまりで、閑職に甘んじた。藤原氏の権力に押さえつけられて、武門の権威は失墜していたのである。これは一族の統領としては堪え難い屈辱であったに違いない。無辜の民を搾取る権力者を風刺したこの歌は、家持が藤原氏に向けて放った痛烈な皮肉の矢であったと考えれば辻褃が合う。家持ほどの歌詠みなら、この程度のも

歌を作るのは朝飯前で、撰者でもあったのだから、「万葉集」の中に粉れ込ませることも容易であったはずだからである。

思わぬ方に筆が滑ってしまったが、現代の辞書では「囀り」の第一義に小鳥の啼き声を挙げ、「舞の手」と「鯨の舌」を除けば、後には人語に関する説明に終始していることは先に述べた。「囀」の同義語の「喋」が「しゃべる・しゃべり」と訓読みされて、いつの頃から使われだしたのか詳かでないが、平安時代には無かったようで、「源氏物語」などでは専ら「囀」が使われている。

従って、山本氏の「専ら鳴禽の声に使われるようになったのは、転義であろう」という先の指摘は、正鵠を射ていると言えないのである。

(この項続く)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとい下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十七巻 五月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成三年 四月二十五日 印刷

平成三年 五月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三三三六二五九四四

〒103（振替）東京八一八二二八七

新刊

法然上人 浄土三部経講説

B 6判 五四二頁
 価四、五〇〇円

法然上人撰述の無量寿経釈、観無量寿経釈、阿弥陀経釈の原典を訓読註解して和訳し、更に和字三経釈の原典を註解和訳したものを加え、本宗所依の経典に対する宗祖の明解な義解を記す

浄土宗勤行の解説

B 6判 三六六頁
 価三、六〇〇円

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B 6判 四二四頁
 価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B 6判 二九六頁
 価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B 6判 八四七頁
 価六、八〇〇円

和訳 浄土三部経

B 6判 四七四頁
 価二、五〇〇円

和訳 法然上人 選 択 集

B 6判 三八七頁
 価二、五〇〇円

和訳 善導大師 観 經 四 帖 疏

B 6判 五八四頁
 価三、五〇〇円

和訳 善導大師 六 時 礼 讃

B 6判 二六五頁
 価二、四〇〇円

○葉書でお申込下さい。代金(送料実費)は後払(振替用紙同封)。

編訳 村 瀬 秀 雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

発 行 所 常 念 寺

電 話 0465-43-1352

振 替 横 浜 3-8296番